

一般の部 「童話大賞」

「ノリオさんの」自慢」

静岡市 田口 今日子

「ふあゝあゝあゝあゝ」

柔らかい朝の光が差し込むベッドの上で、ノリオさんは大きく伸びをしました。

(今日もいい天気だ。。。)

朝食はチーズとレタスを挟んだベーグルサンドと、ミルクたっぷりのコーヒー。それから目玉焼き2つにカリカリベーコン。野菜たっぷりのスープ。ノリオさん、朝からしつかり食べます。

食べ終わったら洗面台で顔を洗うと、シャカシャカツと十秒で歯磨きを済ませました。

「よし、今日も一日がんばろう！」

街で評判の料理店のコック、ノリオさんの一日の始まりです。

「はい！パエリア4人前、お待ちどう様！」

名物のパエリアはこの店の一番人気。お客さんはこれを楽しみに、毎日詰めかけます。でもお客さんの楽しみはこれだけじゃないのです。それは厨房にズラリと並べられた美しい調理道具の数々を眺めること。大小様々な鍋、レードル、ホイッパー・・・使い込まれたものばかりだけど、ノリオさんが毎晩閉店後に愛情込めて磨き上げるため、どの道具もお店の照明を受けて、それはそれは美しく、キラキラと輝くのです。

「まいどあり！また来てね！」

今日も最後のお客さんが店を出ます。

「さてと・・・」

ノリオさんはお店の中を見回しました。汚れたお皿や鍋が厨房に積み重ねられています。

「さあ、今日もピカピカにするぞ！」

ノリオさんは手早く床とテーブルを掃除しました。食器は洗浄機にお任せして、早速調理道具の手入れに取り掛かります。

「今日も一日お疲れ様。ありがとうね。」

そう言って丁寧に汚れを落としていきます。

「ふう・・・」

夜も更ける頃やっと手入れが終わりました。

お腹が空いたノリオさんは厨房に置いてあったチョコをひとかけら、口に放り込みました。疲れた身体にじんわりと甘さが染み渡ります。とたんに疲れと睡魔がノリオさんを襲ってきました。

「疲れたな・・・今日はもう寝よう。」

あくびをしながらそう呟くと、ノリオさんはさつさとパジャマに着替え、そのままベッドに倒れこんでグーグー寝てしまいました。

・・・なんだか騒がしい・・・

ノリオさんは薄く目を開けました。口の中がネバネバします。

水が飲みたいな・・・

明かりを落としたはずの厨房が、やけに明るく見えます。それに何だか、話し声のようなものまで聞こえてくるではありませんか。

「ドロボウか！？ ノリオさんは恐る恐る厨房を覗きこみました。

「・・・ノリオさん、ありがとーーーーー！
ーう！！」

とたんに大きな声と眩い光がノリオさんを包み込みました。びっくりしているノリオさんを囲んでいたのは、厨房の道具たちでした。天窓から差し込む満月の光を浴びてキラキラと輝く調理道具たちは、口々に叫びました。

「ノリオさん、毎日ピカピカに磨いてくれてありがとう！」

「大切に使うてくれてありがとう！」

「お手入れをしてくれてありがとう！」

「待て、待て、待て。」

ノリオさんは目を白黒させて言いました。

「どういう事だい、これは。お前たちは何で喋れるんだ？」

「それはね。」

調理台の上でクルクルと踊っていたミルクパンが答えました。

「僕たちずっとノリオさんにお礼が言いたかったんだ。そうしたら天窓からミソサザイが教えてくれたのさ。」真夜中の3時33分3秒、満月が天窓の真上にかかるとき、特別な魔法がかかるだろう”って。今夜がその時さ。そしたらどうだい！喋れるし動けるんだ！やっとお礼が言えるよ。毎日毎日、ピカピカにしてくれてありがとう。僕たちこれからもずっと頑張るよ！」

調理道具たちは誇らしげに、月明かりをキラキラ反射させました。

「そうだったのか。お前たち、みんなみんな大切な道具達だ。ありがとう。」

その時ふとノリオさんは気が付きました。

楽しい調理道具達のおしゃべりの合間から、悲しげなすすり泣きが聞こえるのです。

その泣き声は小さいけれど、ずいぶん近くから聞こえるような気がします。ノリオさんは辺りをキョロキョロ見回しました。でも泣いている器具は一つもありません。

誰だろう？こんなに悲しそうに泣いているのは？

泣き声はいつそう悲しげに、段々大きくなっていきます。とてもとても近く、ノリオさんのすぐ側で泣いているようです。

「あつ！」

ノリオさんは気が付きました。泣いていたのはノリオさんの歯でした。

ノリオさんが口の中をのぞき込むと、果たしてそこには、ノリオさんの歯達がオイオイ泣いているではありませんか。

「ボク達は毎日磨いてもらってないよう！」

「ボク達だつて毎日お肉を切ったり野菜を砕いたりしているのに・・・」

「いつも汚いまま放つて置かれるんだ・・・」ノリオさんはハッとしました。

そうだ。歯は、食事を噛み砕いてくれる大切な道具の一つなんだ。お鍋やお皿は使ったら毎日洗ってきれいにするのに、私はなぜ歯を綺麗にしようと思わなかったのだろう。よく見ると歯達は、ところどころ黒ずんだり茶色っぽくなったり、黄色い塊がこびりついていたりしていました。しかもなんだか嫌な臭いまでします。

「ごめんよ、ごめんよ、君たちも私の大事な道具だということを忘れていたよ。これからは毎日しっかり歯磨きするから・・・」

ノリオさんが言いかけたその時、歯の間から何か黒くて小さなものが次々と湧き出てきました。そして口々に

「やめる。やめるやめる。」

「歯を磨くなんて、とんでもない！」

「そんなことしないでくれよ。」

「やめる」「やめるー」

と騒ぐではありませんか。

「何だ、お前たちはは！？」

「オイラ達はもうずっと前からここに住んでいるんだ。ここにはクツキー、そこにはチョコレート。食べるもの沢山。住み心地は満点さ。このままでいいんだよ。掃除なんてやめてくれ。」

黒い生き物はあとからあとから湧いてきます。ノリオさんはゾツとしました。

「お前は・・・！虫歯菌か！？」

叫んでノリオさんはベッドから転げ落ちました。厨房の天窓には朝日が降り注ぎ、寝室にも光が差し込んでいます。

「夢・・・？」

ノリオさんは少しの間ぼんやり光を眺めていましたが、突然我に返ったように洗面所に駆け込み、猛然と歯を磨き始めました。

「痛っ・・・！」

口の中に何箇所も、ブラシが当たると痛いところがあります。ノリオさんは慌てて店の入口に「本日休業」の札をかけると近所の歯科医院に駆け込みました。

「あゝ、ひどいねえ。毎日ろくに歯磨きしないでしょ」

歯医者さんは怒りながらノリオさんの歯を治療していきました。そして

「はい、新しい歯ブラシと、歯間ブラシね。

フロスも渡しますよ。歯の間を掃除するのも大事ですよ。一生付き合っていく道具なんだから、大切にね。」

そう言っただけ正しいブラッシングを教えてくださいました。

その日の夜、ノリオさんは歯ブラシと歯間ブラシで、丁寧に歯を磨きました。

「毎日頑張ってくれているのに今までごめん。これからはきちんとお手入れするからね。」

そう言っただけフロスで一本一本の歯の間を丁寧に磨きました。歯磨きが終わると口の中はスツキリ！笑顔もなんだかいつもよりかっこよく見える気がしました。

「はい、パエリア2人前、お待ち！」

今日もノリオさんは厨房で腕をふるいます。お客さんは今日もいっぱい。調理道具たちも大活躍です。

そして今夜もノリオさんは調理道具のお手入れをします。

いつもと同じ、一日のおわり。

でも以前とは違うことが一つだけ。

ベッドに入るその前に、ノリオさんは歯ブラシと歯間ブラシとフロスを持って、鏡の前に立つのです。

「さあ、今日もピカピカにするぞ！」

大きく開けたノリオさんの口の中、白い歯たちが嬉しそうにキラキラと輝いていました。

ノリオさんのご自慢のお店。

美味しい料理にピカピカの調理道具。

そしてノリオさんの笑顔の中心で輝く、真っ

白な歯！

おしまい。